

## 沖縄県伊是名島的美織所伝説

原田 信之  
(日本文学)

沖縄県伊是名島にあるチジン山の中腹に、美織所(チュラウインジョ)と呼ばれる平らな岩がある。この岩にはイハヌマチガニ(伊平屋の松金)と伊江島のナカンカリマカト(仲村渠真嘉戸)との悲恋の伝説が語り継がれている。マカトは松金に会うために伊是名島に来て、この岩の上で、恋人に贈る手ぬぐいにするための布を織ったという。一方の伊江島では、マカトは嫉妬した伊江島の青年たちに追い詰められて海に身投げし、松金も後を追ったと伝えられている。伊是名島の伝承と伊江島の伝承には微妙に異なる点があり、伊江島では伊是名島的美織所のこととは全く語られない。琉歌「仲村渠節」はマカトの恋物語を歌っているとされる。近年、石垣島で組踊「仲村渠真嘉戸」の台本が発見されたが、このことから、かつてマカトの恋物語が沖縄各地で広く知られていたらしいことがわかる。仲村渠マカトと美織所にまつわる伝説は、南西諸島における伝説の伝播の問題や事物起源伝説の問題等を考える際にも重要な手がかりを与えてくれるものと考えられる。

(キーワード) 仲村渠節、ナカンカリマカト、美織所、伊是名島、組踊

### はじめに

南西諸島各地では多くの悲恋物語が語り継がれている。それらのなかで良く知られているものの一つに、イハヌマチガニ(伊平屋の松金)とナカンカリマカト(仲村渠真嘉戸・仲村柄真嘉戸)の悲恋物語がある。伊平屋の松金は伊是名島の男性で、ナカンカリマカトは伊江島の女性であったと伝えられている。また、琉歌「仲村渠節」はナカンカリマカトの恋物語を歌ったものとされる。

沖縄本島北部の本部半島の北方海上約三十キロに位置している伊平屋列島は、

伊平屋村に属す伊平屋島・野甫島と、伊是名村に属す伊是名島・屋ノ下島・屋那覇島・降神島・具志川島とを合わせて大小七つの島々からなり、かつては「伊平屋のななはなり(七離れ)」と呼ばれ、伊平屋島とも総称された。また、伊平屋村を後地(クシジ)、伊是名村を前地(メージ)と呼ぶこともある。現在、伊平屋村には田名・前泊・我喜屋・島尻・野甫の各集落があり、伊是名村には内花・諸見・勢理客・仲田・伊是名の各集落がある。伊平屋列島には藤貞幹『衝口発』と本居宣長『鉗狂人』の論争で知られるようになった降臨神話が伝承

されている<sup>(1)</sup>。また、この伊平屋列島の、伊平屋島から第一尚氏、伊是名島から第二尚氏の始祖が出ており、その点からも注目される島々である<sup>(2)</sup>。

マカトが住んでいたという伊江島は沖繩本島北部の本部半島備瀬崎の西方海上約五キロに位置している。伊江島の北東海上約二十キロに伊是名島があり、伊是名島にあるチジン山の中腹に美織所（チユラウインジヨ）と呼ばれる平らな岩がある。伊是名島では、伊江島のナカンカリマカトと伊平屋の松金との悲恋の伝説がこの岩の由来譚として語り継がれている。

本稿は、現地で採集した口承資料などの検討を通して、伊是名島の人々の間で語り継がれてきた美織所伝説についてまとめ、南西諸島の事物起源伝説の一面を考察することを目的とする。

### 1 仲村渠節とマカト伝説

現在の沖繩諸島では、伊平屋の松金と伊江島のナカンカリマカトとの悲恋の伝説は良く知られている。この伝説が広く知られるようになった原因の一つとして、琉歌「仲村渠節（ナカンカリブシ）」の存在があると考えられる。琉歌は琉球の歌を意味する短詩型の叙情詩で、十五、六世紀頃に発生したとみられている<sup>(3)</sup>。「仲村渠節」は、次のような歌である。

仲村渠そはいどますだれは下げてあにあらはもとまば忍でいもうれ

（仲村渠は厳格な家ですけれど、裏側の戸にすだれを下げてある場合は大丈夫です。夫ですから、それをたしかめられたら忍んでいらっしやう下さい<sup>(4)</sup>）

仲村渠家の娘が恋人と密かに会うためにすだれを合図に利用したという内容で、仲村渠家は伊江島の旧家とされている。仲村渠節がいつ頃から歌われているのかは良くわからないが、屋嘉比朝寄（やかびちようき、一七一六〜一七七五）が編纂した琉球古典音楽の楽譜『屋嘉比工四（やかびクンクンシー）』（編纂年不詳。琉球大学附属図書館伊波普猷文庫所蔵）に「仲村渠節」が収載されていることから、少なくとも屋嘉比朝寄が亡くなった一七七五年以前には歌われていたらしいことがわかる。『屋嘉比工四』所収「仲村渠節」の、三味線

（三線）の旋律符号の右側にカタカナで付された歌詞には「ナカンカレソバドマシダラドサゲル アニエラハントモテ シノデイマウリ」とある<sup>(5)</sup>。

また、「ナカンカリ節」は三味線歌謡としての琉歌を集大成したものとされる『琉歌百控（りゅうかひやくこう）』（一七九五〜一八〇二編纂。琉球大学附属図書館伊波普猷文庫所蔵）にも収載されている。『琉歌百控』には、次のように記されている。

ナカンカリ節 伊江嶋

仲柄節 伊江嶋  
仲柄そはい戸真簾は提て  
あにやらわん思は参れ忍は<sup>(6)</sup>

『琉歌百控』に収録されているナカンカリ節の表記は「仲柄節」となっている<sup>(7)</sup>。このことから、ナカンカリ節の漢字表記には「仲村渠節」と「仲柄節」の二つあることがわかるが、通常は「仲村渠節」と表記される。『琉歌百控』の「仲柄節」は、末尾に「大清乾隆六十年乙卯正月十日 撰写与書」（清の乾隆六十年乙卯は日本の寛政七年（一七九五）と記されている上編「琉球百控乾柔節流」に収められている。ナカンカリ節は三味線を伴奏にして弾き歌いされた著名な琉歌であったことから、歌とともにナカンカリマカトの伝説が広まっていたものと思われる。

大正八年（一九一九）に刊行された島袋源一郎氏（一八八五〜一九四二）著『沖繩県国頭郡志』の「第二十七章 口碑伝説」には「伊江島仲村渠マカト遺念火」と題する次のような話が収載されている（考察の都合上、便宜的に記号A〜Eを付した。また、誤植とみられる箇所には丸括弧内に\*印を付して注を記した）。

伊江島仲村渠マカト遺念火

A 今より凡そ百年前伊江島東江前に仲渠村（\*仲村渠カ）マカトと呼べる絶世の美人ありき是ぞ「仲村渠すべど真簾はさげてあにやらはんとまば忍でいもうれ」と詠める古歌仲村渠節の主人公なる。時に伊平屋島の美男松金マカトの名一世に鳴れるを聞きいかにかして吾が胸を打ちあけんものと

日夜念願止まざりき。

B さる程に男は扁舟に棹して伊江の小島に渡り遂にマカトに会ひて焦る、胸の思を語り明すことを得たり是より二人は折々村人の目を盗み人跡稀なる後浜の岩下に蜜の如き言の葉を交はし居たり。されど十数海里を隔てたる深海の事なれば夜毎に通はんも意の如くならずその上マカトは豪家の出なれば夜の閑所は流石に越え兼ねしものと見へ昼間紫苔採りを名として後浜に通ふを常としたり。

C 或日マカト常の如く小籠を負ひて後浜に忍び行きしに男も約束の日を違えず遙々と伊平屋の島より漕ぎ来りぬ。此に伊江の島人は近頃マカトの足繁く後浜に通ひ歩くは何か仔細あらんと噂し合へり。一日村の若者等其実否を窺ふべく後浜に其後を狙ひ行きしに果せる哉彼の恋人は漕手おそしと近づき来りぬ。若者等嫉妬の念炎々として鬼の首を取りたるが如く群集忽ち騒ぎ立てり、マカト今はせん術なく翻然断崖より身を躍らしぬ男も亦之を見て悲嘆の余り契りし人の後を追ひて入水し二人の恋人はかくして遂に悲惨なる最後を遂げたりといふ。

D 今伊江の島北海岸に毎夜妖火の現はる、は即ち此のローマンズの遺念火なりと伝ふ。

E 上原(後浜)の紫苔や取ゆるものあらん、仲村渠カマト(\*マカトカ)潮に採まぢ。

七つ棧戸引ちあけて見れば仲村渠まかとみわれはぐち。

仲村渠まかゝ七ひづち布や、伊平屋の松金があそびてさじ。

「緒言」によれば、『沖繩県国頭郡志』は大正三年に企画され、国頭郡教育部会並校長会に依頼された島袋源一郎氏が大正四年四月から大正六年十月までの約三年をかけて執筆したものだといふ。本書の「材料項目」は、「各村長校長」に「調査方を依頼」し、「内容に関しては郡内村長校長の閲覧を経た」とされている。また、口碑伝説等については、「名所旧蹟の由来、口碑伝説、人物伝記、旧家由緒等の記事に就きては直に信憑し難きもの尠からざれども是れ却つて読

者の感興を惹き且史実其中に発見せらるべきものあるを想ひ敢へて改竄を試みざりき」と記している<sup>9)</sup>。このことから、『沖繩県国頭郡志』に記載されている内容は、企画された大正三年から大正四年頃にかけて沖繩県国頭郡内の各村長校長が依頼を受けて調査したものを元にしたもので、原稿完成後さらに郡内村長校長のチェックを受けたものであることがわかる。注目される点は、口碑伝説等の中には信じ難いものも少なからずあるがえて改変せずそのまま掲載したと述べていることである。

これらのことから、「第二十七章 口碑伝説」に記載されている「伊江島仲村渠マカト遺念火」という伝説も、「村長校長」経由で「調査」されたものを元に執筆され、さらに原稿「内容」も「村長校長の閲覧を経た」ものであることがわかる。つまり、「伊江島仲村渠マカト遺念火」という伝説は、大正三年から大正四年頃に伊江島で伝承されていた内容をそのまま紹介したものとらえてよいと思われる(ただし、「村長校長」による多少の修正はあつたかもしれない)。次に、「伊江島仲村渠マカト遺念火」の内容を見てみる。

A 部分には、「今」から約百年前、伊江島東江前に仲村渠マカトという絶世の美人がいたこと、マカトは仲村渠節の主人公であること、伊平屋島的美男松金がマカトの評判を聞いて思いを打ち明けようという強い願いを持ったことが記されている。

B 部分には、男が小舟をこいで伊江島に渡りマカトに会って告白したこと、二人は恋仲になつて村人の目を盗んで会うようになったこと、十数海里隔てた別の島から夜毎に小舟で通うのは困難でしかもマカトは豪家の娘なので夜に会うのは難しいため昼間に紫苔採りを口実にして後浜に通うようになったことが記されている。(なお、シセは岩に付く青海苔のことで、時期になると島の人はシセ採りに行くといふ)。

C 部分には、ある日マカトがいつものように小籠を負つて後浜に忍んで行き男も伊平屋島から小舟を漕いで来たが、伊江島の若者等が見つけて嫉妬して騒ぎ立て、マカトは断崖に身を投げ男も後を追つて亡くなったことが記されてい

る。

D部分には、今でも伊江島の北海岸に毎夜二人の遺念火が現れると述べられている。

E部分には、伊江島で歌われているマカトに関する琉歌が三首紹介されている。

A部分に「今より凡そ百年前」とあるが、この「今」は『沖縄県国頭郡志』が刊行された年だとすると「大正八年（一九一九）」ということになり、それより「凡そ百年前」とすると、一八〇〇年代の初め頃、つまり十九世紀初頭頃の事件であったということになる。しかし、先にみたように、仲村渠節は『屋嘉比土工四』に収載されており、屋嘉比朝寄が亡くなった一七七五年以前には歌われていたらしいことから、少なくとも一七〇〇年代の半ば頃、つまり十八世紀半ば頃にはこの事件が発生していた可能性が高いと考えられる。

また、A部分にマカトは「伊江島東江前」の娘であったと記されているが、正しくは「西江上の仲村柄屋の娘」であるという<sup>10)</sup>。

伝説「伊江島仲村渠マカト遺念火」も、琉歌「仲村渠節」の内容も、伊江島での伝承を元に記されたものとなっている。そして、琉球諸島で語られるマカトの物語も同様である。しかし、マカトの恋人「伊平屋の松金」がいたという伊平屋列島では、他の島々とは異なる独自の内容が伝承されている。次に、伊平屋列島の事例をみてみることにする。

## II 伊是名島的美織所

伊平屋島・伊是名島で調査すると、ナカンカリマカト（仲村渠真嘉戸・仲村柄真嘉戸）の相手は、イハヌマチガニ（伊平屋の松金。または単にマチガニと称される）という男性で、伊是名島の人であったと語られる。イハ（イヒヤ）は、大小七つの島々（伊平屋島・野甫島・伊是名島・屋ノ下島・屋那覇島・降神島・具志川島）からなる伊平屋列島全体をさすので、実際は伊是名島に住んでいた松金をイハヌマチガニと呼んだことがわかる。先にみた『沖縄県国頭郡

志』に収載されている「伊江島仲村渠マカト遺念火」には相手を「伊平屋島的美男松金」と記してあったが、正しくは「（伊平屋列島）伊是名島的美男松金」ということになる。

次に、伊是名村字諸見で直接採集した話をみてみることにしたい。

### 〈事例1〉「美織所の話」

成人してからですね、二十以上なつてから、二十六七時代の恋の物語が、この話ですがね。そのマカトウが、松金ましがにのために、手ぬぐいですがね、それを織ったという場所もあるんです。畳、四畳ぐらいの、平たい石があるんですよ。その石の上で、布織りをしたという、伝説。その場所も、はっきりありませんよ。布織所（ヌノウイジュ）とか、あるいは、美織所（チュラウインジュ）とかいう地名がありますよ。そこで布織りをして、まあ、相手の松金に、あげた。マカトウは伊江島の出身で、家は大変その、富豪で、しかも村一番の美人であった。それでもう、島中の青年の羨望の的だった。そういう美少女と伊平屋の松金と、どうしてこの、恋を語る機会があったのか、その辺は知らんですがね。で、向こうの青年たちは、色いろ、嫉妬をした。ある日、伊平屋の松金も、一人舟をこいでマカトウに会いに行った。で、その、場所示し合わせて、「伊江島の北海岸、まあ、場所を指定してそこで会おう」と言って相談をした。で、松金が行ったところ、マカトウは来ない。で、なぜ来なかったかという、まあその、親たちが、遠い、伊是名の島のその男とのあれは、まあ、不賛成である。しかも、村の青年たちが嫉妬して、どんな危険な目にあうかもしれないと思って、家を嚴重にしてですね、監視して、行かさなかつた。ほいである、普通、この沖縄の雨戸は、横側が六本ですよ。それを、一本添えて七本の雨戸にして、マカトウをもう家に閉じ込めて。そして、松金は会いにいつて、とうとうもう、マカトウの家に行つて、ノックしても返事がない。仕方ないから、力いっぱいやって、その雨戸をですね、引き開けてみたら、そこにはそのマカトウが、笑顔で待っておつた。そうようして、その晩は、そうようして語り合つて。

へから、またある日、マカトウが海岸に、松金に会いに行く、ということを知った青年たちがですね、その後を追って、

「こいつ、伊是名島にやったらいかん」と言ってますね、後を追うて行ったら、とうとうその、追い詰められて、マカトウはもう仕方なく海に飛び込んで、入水自殺をしたと。で、それを見た松金も、

「この世で添えないなら、あの世へ行って添おう」と言ってますね、後を追うて飛び込んで、二人、入水自殺したと。まあそんな伝説があつて。

そしてあの、伊江島の北海岸ですが、まあ場所もありますがね、この、マカトウの家、屋敷跡もあるそうですね。墓もあるそうですね。向こうではあの、記念碑もあるんですよ、ロマンスの。

そういう話（遺念火が出るという話）ありますね。向こう、二人がその、飛び込んだ、所ですね、北海岸の。見た人はいますかね。遺念火が、出ていたと。<sup>11</sup>

〈事例1〉は伊是名島にある美織所(チュライインジユ)という岩の上で美人のマカトが松金の手ぬぐいを作るために布を織ったという美織所由来譚から始まっている。ある日、松金が舟で伊江島に行った時、嫉妬した伊江島の青年たちに追い詰められてマカトは北海岸で入水自殺し、松金も後を追って入水自殺した。その後、二人が自殺した伊江島の北海岸では遺念火が出るらしいと語られている。

伊是名島でマカトの話を知ると、〈事例1〉のようにマカトが美織所で松金の手ぬぐいを作るために布を織ったらしいと語られる場合が多い。美織所はチジン山(地神岳)の南斜面中腹にある平らな岩の名で、その岩の場所から伊江島が遠望できる。伊江島では松金がマカトに会いに舟で来たことのみが語られるが、伊是名島では伊江島の美人マカトが伊是名島に来て美織所という岩の上で布を織りながら松金を待ったことが岩の由来譚として語られる。常には松金が入水自殺したと、時にはマカトが伊是名島に来ることがあったということなのである。

『伊平屋列島文化史』の「美織所(ツライインジユ)」の項に「伊是名、

地神岳の麓に小高い森がある、松林の中に、上部が平かでつるつるした三坪程度の石畳がある、この石畳を美織所と称している。ここはかつて伊是名部落の若者等の毛遊びの場所であつた主婦や若い女子達が布織り盛んなその昔、住家がせまいとて、夏の季節になると、この美織所に仮小屋を建て、こゝで布を織つたとの伝承がある、これが美織所の名の起りだといわれている<sup>12</sup>」という記述がある。この記述から、かつてはこの平らな岩周辺が伊是名集落の若者たちが集合して遊んだ場所であつたことや、主婦や若い娘たちが夏になるとこの岩の上に仮小屋を建てて布を織つたので美織所と称されるようになったという伝承があつたことなどがわかる。この岩のある場所は、チジン山の中腹に位置する小高い所で、集落から適度に離れ、風が良く通り、見晴らしも良い場所であることから、若者たちの遊び場所や夏季の布織り場所に使われたものと思われる。これらの風習がいつ頃からあつたのかは不明であるが、若者たちの遊び場所でもあり、娘たちの布織り場所でもあつたというこの「美織所」という岩が、マカトの恋物語の由来と結びつけられて伊是名島で語られてきた点は、極めて興味深く、注目される。

次に、伊是名村字伊是名で直接採集した話をみてみる。

〈事例2〉「美織所の話」

青年達に、あまりもうあの、信用が、女童(めわらび)からは信用があつて、女童からは、もう、大変慕われていたそうですね。だからあの、この、青年達が、追っ払うみたいな感じで、奥間の方に、行かれて、そしてそこで、一応向こうに、追われて行ってまた、第二、ほれ尚巴志ってありますでしよう、あの、頃にまた、佐敷の、佐敷按司って、所で、見初められて、もうこの王様にはね、尚田王金丸しか、出来ないということでもまた、こうずっとね、いらしたみたいですね。

そしてあの、向こうから、伊江島からのナカンカマカター(仲村渠真嘉戸)って、今、ここ、この、八月の一日ね、組踊してもらってますね、このあの、村協会でいう、三味線グループがあるんです。芸能。で、その人達が組踊、

作って、向こう八重山からもいらして。この、ナカンカリマカターの由来は、あの、伊是名だということ、この組踊して、やったんですがね。このナカンカリマカトウーは、伊江島の人みたい。そして二人恋仲で、もう、向こうの今婦仁とこの、チュラウインジョ（美織所）つてここにあるんですよ。あのチジン山の下にですね。平つたいあの、織物、何か機織りした、とかという。その場所が二人の恋仲の、あの、伝説、だということ、よく、小さい頃、婆ちゃんたちから、聞きましたけど。<sup>13</sup>

〔事例2〕は前半と後半に分かれており、前半は尚円王金丸の話、後半はマカトが美織所で機織りをしたという話になっている。なお、前半の語りのうち、「第二尚巴志」は第二尚氏の語り違いとみられ、「佐敷按司」は第一尚氏の尚巴志王がかつて佐敷小按司であったこととの混同とみられる。伊平屋列島のうち、伊平屋島から第一尚氏が出て、伊是名島から第二尚氏が出たわけであるが、〔事例2〕の話者はこれらを混同し、マカトの恋人であった松金は「尚円王金丸」であったとして美織所の話を語っていることがわかる。伊是名島では尚円王の幼名を「金丸」または「ニシヌマチガニ（北の松金）」と呼ぶことから、マカトの恋人であった「マチガニ（松金）・イハヌマチガニ（伊平屋の松金）」との混同が生じたと推定される。この混同は広くみられ、伊是名島や伊平屋島のみならず伊江島においてもマカトの恋人であった松金は「尚円王金丸」という語りを聞くことができる。<sup>14</sup>

琉球の正史『中山世鑑』によると、尚円は明の永樂十三年（一四一五）に伊是名島首見（諸見）で生まれ、正統三年（一四三八）に伊是名島から沖縄本島に出て、成化六年（一四七〇）に即位し、成化十二年（一四七六）に亡くなったとされている。<sup>15</sup>

伊是名島に伝わる尚円に関する琉歌は多数あるが、そのうちの一つを示す。

北（にし）ぬ松金（ましがに）が短（いん）ちゃ御衣（んす）みそち

ういんなし振（ぶ）りや拝（うが）み欲（ぶ）さぬ

（北の松金が丈の短い着物を召して働らいている姿を拝んでみたいものだ）<sup>16</sup>

ここに歌われている「北（にし）ぬ松金（ましがに）」（傍線部）が尚円のことである。第二尚氏尚円王はマカトの時代より数百年も前の人物であるので、イハヌマチガニ（伊平屋の松金）とニシヌマチガニ（北の松金）は全くの別人で、明らかな誤認である。どちらもマチガニ（松金）という名なので、混同が生じたものと思われる（伝承の世界では著名な人物との混同はよくみられる）。では、マカトの恋人であったイハヌマチガニ（伊平屋の松金）は、伊是名島のどの地域に住んでいたのであろうか。

伊是名村には内花・諸見・勢理客・仲田・伊是名の各集落がある。これらのうち内花は昭和十七年に諸見から分離して一字となった新しい集落なので除外できる。<sup>17</sup>このことから、諸見・勢理客・仲田・伊是名のどれかということになるが、島で調査しても伝承が完全に途絶えており、全くわからなかった。民間説話の中で語られている場所としては、諸見説と伊是名説があるが、諸見は尚円王となったニシヌマチガニ（北の松金）が生まれた所なので尚円との誤認により諸見説が生じたものと推定され、除外して良いと思われる。残ったのが伊是名集落説であるが、美織所は伊是名地内にあることから、マカトの恋人であったイハヌマチガニ（伊平屋の松金）は伊是名地内に住んでいたとみるのが最も妥当かと思われる。

伊是名集落に関し、『伊是名村誌』は「字伊是名は元伊是名城下にあったことがはっきりしていて、元いた所と云うので元島と云い伝えられている。（略）民間伝承によると伊是名は元島から、現伊是名の北後方の小高い上村に移って（年代不明）来て飲料水はソウジ井泉（かー）ツーヤ井泉を利用したと伝えられ、今でも正月、九月には川拝（かーおが）みの儀が行われている。上村に移ったものの、ここは田畑や海にも不便であるばかりでなく、台地であるだけに台風被害も大であるのでその害もいくらか避けられそうな現在の低地に移って来た」と伝えられている<sup>18</sup>と記している。移転した年代は不明とのことであるが、伊是名集落は元島、上村、現在地と三回移転したようである。伊是名城下の集落であった元島時代は年代が古く美織所とも離れているので、イハヌマチガニ

が生きていた時代の伊是名集落は、美織所にも比較的近い「上村」に集落があった頃であった可能性が高いように思われるが、詳細は不明である。<sup>19)</sup>

イハヌマチガニ（伊平屋の松金）の子孫を名乗る家は伊是名島では確認できないので良くわからないが、仲田清英氏は第二尚氏尚田王の叔父に当たる伊是名集落の銘苺里主の後裔である銘苺家の人物であったのではないかとし、銘苺家の家譜には該当の人物はいないが、「士族が他島に渡り百姓娘と不義を働いて死んだので、それが家名にも、かかはるとの当時の厳しいおきてがあったので、闇に葬り去られたのではなからうか。（略）世間の噂も口止めにして居たと思う。

又、仲村渠マカトの墓は現存して居るが、伊平屋の松金の死後は言伝へもはっきりしていない。つまり美男子伊平屋の松金は其の名前からして、銘苺殿内一族の士族であった事は疑いなく思う<sup>20)</sup>と述べている。筆者も松金の子孫や墓の伝承がないか調査してみたところ、「字伊是名」に住んでいたらしいという程度の伝承は存在していたが、子孫や墓に関しては伝承の痕跡さえ見いだせなかった。琉球諸島で調査すると、数百年前の先祖のことであっても、確実な先祖とされる場合には比較的濃密に伝承されていることが多いので、伝承の痕跡さえ見いだせなかった点が逆に気になった。「家名にも、かかはるとの当時の厳しいおきてがあったので、闇に葬り去られたのではなからうか」という仲田氏の説は確認しようがないので詳細は不明であるが、魅力的な仮説といえよう。

### III 伊是名島の琉歌とマカト

伊是名島では伊平屋の松金と仲村渠マカト（マカテ）に関係する琉歌が複数伝えられている。

一、寒露北風や波荒さあむぬ 霜降る北風ぬ吹かばいもう

（寒露の北風が吹いたら海が荒れますので、霜降りの北風になったらいらっしゃって下さい）

二、伊平屋渡立つ波に夢や橋かきてい 夜々に無蔵お側渡てい行ちゆき

（伊平屋渡は波が荒く七島灘と共に大和旅の難所として、世人にこわがら

れているが、恋しい人に会いたい切ない思いで、夢は夜毎波と波とに橋をかけて、彼女の側に渡って行くのである）

三、伊平屋立つ波やらば波い 岸かくまむとうぬ大波小波

（大和旅の難所伊平屋渡のどんな山のような波でも彼女の事を思えば、港内の隅つこの小波みたいなものでおそるに足りない）

四、仲村渠マカテ七ひぢち布や 伊平屋の松金が遊び手拭

（仲村渠マカテの手織りの七ひぢち布は、伊平屋の松金が毛遊びに使う手拭になる）

五、七ち棧戸引ち開きてい見りば 仲村渠マカテ目笑齒齧

（七つの雨戸を引き開けて見れば、愛しいマカテの美しい顔がまっている）<sup>21)</sup> これら五つの琉歌から、恋しい人に会うために松金は夜毎荒い波を越えて海を渡ったこと、マカトは恋しい「伊平屋の松金」（傍線部。伊是名でもこう呼ぶ）を待ちながら彼が使う手拭を織ったこと、松金と会った時マカトは満面の笑顔で迎えたことなど、若い二人が深く愛し合っていた様子がうかがえる。

これらの琉歌は伊是名島では良く知られており、マカテの話を知ると、これらの琉歌の一部を利用して語られることがある。例えば、〈事例1〉「美織所の話」の「その雨戸をですぬ、引き開けてみたら、そこにはそのマカトウが、笑顔で待つておった」という語りの部分は、五首目の琉歌「七ち棧戸引ち開きてい見りば 仲村渠マカテ目笑齒齧」をふまえたものとなっていることがわかる。また、〈事例2〉「美織所の話」の「チュライウインジョ（美織所）ってここにあらんですよ。あのチジン山の下にですぬ。平ったいあの、織物、何か機織りした、とか」という語りの部分は、四首目の琉歌「仲村渠マカテ七ひぢち布や 伊平屋の松金が遊び手拭」をふまえたものとなっている。

### IV 組踊「仲村渠真嘉戸」

ナカンカリマカト（仲村渠真嘉戸）とイハヌマチガニ（伊平屋の松金）の恋物語は、琉歌「仲村渠節」で広く知られるようになったらしいことはすでに確

認したが、組踊台本まで作成されたことが明らかになっている。

組踊（くみおどり）とは、沖縄独特の伝統楽劇のことで、琉球国劇ともいう。玉城朝薫が初めて創り、一七一九年（琉球の尚敬七年、清の康熙五十八年、日本の享保四年）に冊封使（冊封のために来琉した中国皇帝の使者）歓待の「重陽の宴」で初めて上演されたという。組踊は幾つかの舞踊を劇のストーリーにあわせて組み合わせ、登場人物の台詞と地謡による歌曲によって劇全体を展開していくというもので、古くは一部の支配階層で観劇されていたが、廃藩置県前後から急速に地方に伝播して村踊りで演じられるようになったとされる。

新出の組踊台本「仲村渠真嘉戸」は、昭和六十三年に当間一郎氏が石垣島に伝わっていた伊舎堂用八所蔵『組踊集』の中から見いだした新発見組踊四番の一つであるが、成立年代は不明である。組踊「仲村渠真嘉戸」の登場人物は五人で、四つの場面で構成されている（以下、登場人物のまとめと各段の梗概は当間一郎氏の報告によった<sup>23)</sup>）。

◆登場人物

仲村渠真嘉戸（伊江島の女性。十四歳）

西の松金（伊平屋島（今の伊是名島）の男性。十六歳）

供（西の松金の供）

船筑登之（仲村渠真嘉戸を伊平屋島へ運ぶ船頭）

仲村渠使（真嘉戸の両親の使）

◆各段の梗概

第一段……仲村渠真嘉戸ぐわは、前からお慕い申しあげている伊平屋島の西の松金あいたさに、船筑（登之）が、伊平屋島へ出航するのに頼み込み、便乗させてもらう。

第二段……西の松金は、三月三日の上日に、伊是名原・伊是名浜に出て花を見、磯をながめようと供にいつけ、二人して出かける。美しい花に心を踊らし、遠くの東方に見える奥辺戸の崎や、今帰仁城あたりまで眺められることを供と語り合う。西方に伊江島を見、仲村渠真嘉戸ぐわの美しさをのべ、歌のや

りとりしたことなど、真嘉戸ぐわへの思いを語る。

第三段……真嘉戸ぐわは、船筑（登之）の案内で、無事伊是名浜へつく。そして原・浜遊びをしている松金と供にあう。縁の深さを味わう。二人は再会を喜びあい、手を取りあつて踊りながら松金の屋敷へ戻る。

第四段……真嘉戸ぐわが、こっそり家を出て、二十日あまりも音信がないので、両親は心配して病床についていることを、仲村渠使がのべ、伊是名島へ渡る。真嘉戸ぐわに、親孝行だと思つて帰つてくれることを強調すると、真嘉戸ぐわは承知する。松金と真嘉戸は、再会を約束して別れる。

当間一郎氏は組踊「仲村渠真嘉戸」について、「組踊では西の松金様に思いをよせる積極的な女として設定され、舟頭（伊平屋島通い）に頼んで伊平屋島へ出かけて、思いを成就させる明るい主人公像に仕上がっている」「若き二人の愛がつづられており、明るく、主体的に行動する真嘉戸像がはっきりと出てたのもしい。伊是名島の景観のみごとさをのべながら真嘉戸の思いの深さ、それに呼応するかのよう、松金の心が美しく描かれているのは、作者の力量が抜群で、土地柄を熟知した、センスある人の手になるものと見たい」と評価している<sup>24)</sup>。

この組踊「仲村渠真嘉戸」の内容は、伊江島や伊是名島に伝えられている伝承とはかなり異なっている。おそらく、仲村渠真嘉戸の伝承をヒントにして、若い男女の恋物語として新たに作成されたものと推定される。若い二人の恋愛模様には焦点をあてる作品にするため、伝説前半の恋愛部分のみを描き、伝説の後半で語られる悲劇的な結末は意図的に記さなかったのであろう。組踊「仲村渠真嘉戸」では松金を「西の松金」と表記しているが、西（ニシ）は「北」を意味する「ニシ」の誤記かと思われる<sup>25)</sup>。ただし、先に述べたように、伊是名島では、マカトの恋人を「イハヌマチガニ（伊平屋の松金）」と呼び、尚田王金丸を「ニシヌマチガニ（北の松金）」と呼んで区別している。伊是名島でも両者が混同して語られる場合が多いが、組踊「仲村渠真嘉戸」の作者も混同してマカトの恋人を「西の松金」（ニシヌマチガニ・「北の松金」の意）と表記したものと推定される（意図的な改変である可能性もある）。

なお、先にみた〈事例2〉「美織所の話」の話者が、後半部分で「組踊」上演について語っているが、これは平成四年八月一日の伊是名村まつりで組踊「仲村渠真嘉戸」が上演されたことを述べている。筆者は伊是名島に何度も調査に行っているが、〈事例2〉は筆者が平成四年八月、伊是名村まつり終了直後に行つて調査した時に採集したもので、「この、八月の一日ね、組踊してもらつて」とはっきりと日付が語られている。この上演は組踊台本「仲村渠真嘉戸」を発見した当間一郎氏が中心となつて行つたもので、氏は「この組踊は、平成四年八月一日の伊是名村まつりで上演され、大好評を博したことを申し添えておく。その際には二年近くをかけて台本研究等を綿密にやつて、あらゆる検討を加えての上演であつた」と述べている。

組踊は各地方の村踊りで演じられたようであるが、昭和四十一年（一九六六）に刊行された『伊是名村誌』によると、伊是名島の各字村芝居で古来から演じられて来た組踊は次のようなものであつたとされている。

伊是名……大川敵討、姉妹敵討、久志の若按司、護佐丸

仲田……花売りの縁、手水の縁、東辺名、屋蔵の比屋、姉妹敵討

諸見……高山、本部、東辺名、中城若松、森川の子、銘苅子

勢理客……伏山、国吉の比屋、護佐丸、久志の若按司、村原、姉妹敵討

組踊「仲村渠真嘉戸」台本中に「伊是名原」・「伊是名浜」という地名が出てくることから、組踊「仲村渠真嘉戸」の作者は伊是名島に取材に来た可能性が高いと推定される。しかし、伊是名島の各字村芝居リストの中に「仲村渠真嘉戸」の名がないことから、伊是名島には組踊「仲村渠真嘉戸」が伝わらなかつたことがわかる。伊是名島に伝わる「美織所の話」そのものが悲恋の物語であることに加え、二人が入水自殺したことや遺念火の話が現在でも生々しく語られていることなどから、上演を意図的に避けた可能性もあるように思われるが、単に台本が伝わらなかつただけなのかもしれない。

## 結語

以上で、伊是名島の人々の間で語り継がれてきた美織所伝説に関する筆者なりの考察を終えることとした。

現在の沖縄諸島では、広く琉歌「仲村渠節」が歌われており、伊平屋の松金と伊江島のナカンカリマカトとの悲恋の伝説も良く知られている。仲村渠節がいつ頃から歌われていたのかは良くわからないが、屋嘉比朝寄編『屋嘉比土工四』に「仲村渠節」が収載されていることから、少なくとも屋嘉比朝寄が亡くなった一七七五年以前には歌われていたらしいことがわかる。このことから、少なくとも一七〇〇年代の半ば頃、つまり十八世紀半ば頃にはマカトをめぐる事件が発生していた可能性が高いと考えられる。

マカトが住んでいた伊江島では、伊平屋の松金が舟でやつてきて美しいマカトと会つたこと、マカトは海苔採りに行くふりをして伊江島北部の後浜で松金に会つていたこと、嫉妬した伊江島の青年たちに追い詰められて二人が入水自殺したこと、二人の遺念火が今も伊江島の北海岸に現れることなどが語り伝えられている。

一方、松金が住んでいた伊是名島では、チジン山の中腹にある「美織所」と呼ばれる平らな岩の起源としてマカトの伝説が語り伝えられている。マカトは松金に会うために伊是名島に来て、この岩の上で松金に渡す布を織りながら待つたという。この伊是名島にある「美織所」という岩をめぐる伝説は、伊是名島のみで語られており、伊江島では語られていない。

伊是名島では、マカトの恋人を「イハヌマチガニ（伊平屋の松金）」または「マチガニ（松金）」と呼び、尚円王金丸を「ニシヌマチガニ（北の松金）」と呼んで区別している。しかし、伝承の世界では両者を混同して語る場合がある。尚円（一四一五〜一四七六）はマカトの時代より数百年も前の人物であるので、イハヌマチガニ（伊平屋の松金）とニシヌマチガニ（北の松金）は全くの別人で、明らかな誤認である（マカトの事件が十八世紀半ば頃のことだとすると約三百年の差がある）。どちらもマチガニ（松金）という名なので、混乱が生じた

ものと思われる。

伊是名島では松金とマカトに関係する琉歌が複数伝えられている。松金とマカトに関係する琉歌の内容は、伊是名島で語られる「美織所」伝説の語りに影響を与えていることがうかがえる。この、松金とマカトに関係する琉歌の存在が、「美織所」伝説を伝える力の一つになっているようにも思われる。

伊是名島で「美織所」と称されている平らな岩の周辺は、かつて伊是名集落の若者たちが集合して遊んだ場所で、主婦や若い娘たちは夏になるとこの岩の上に仮小屋を建てて布を織ったという。この岩のある場所は、チジン山の中腹に位置する小高い所で、集落から適度に離れ、風が良く通り、見晴らしも良い場所であることから、若者たちの遊び場所や夏季の布織り場所に使われたものと思われる。伊是名島の琉歌の一つに「仲村渠マカテ七ひぢち布や 伊平屋の松金が遊び手拭」と歌われているように、マカトは恋人の松金が「モーアシビ」（若者たちが集合して遊ぶことをいう）<sup>28</sup>で使う手ぬぐいを「美織所」と称される岩のうえで織ったとされている。かつての琉球文化においては、恋人に娘が手ぬぐいを織って贈るといふ風習があった。<sup>29</sup>マカトが「美織所」と称される岩のうえで布を織ったという伝承は、この風習をふまえたものとなっていることがわかり興味深い。若者たちの遊び場所でもあり、娘たちの布織り場所でもあったというこの「美織所」と称される「岩」が、マカトの恋物語の由来と結びつけられて伊是名島で語られてきたことは、事物起源伝説の問題を考えるうえで注目される。

近年、石垣島で組踊「仲村渠真嘉戸」の台本が発見された。このことから、松金とマカトに関する伝説が組踊のテーマに採用されるほど広く知られていたことがわかる。組踊「仲村渠真嘉戸」台本中に「伊是名原」・「伊是名浜」という地名が出てくることから、組踊「仲村渠真嘉戸」の作者は伊是名島に取材に来た可能性が高いと推定される。しかし、伊是名島の各字村芝居リストの中に「仲村渠真嘉戸」の名がないことから、伊是名島には組踊「仲村渠真嘉戸」が伝わらなかったことがわかる。

本稿では、伊是名島に伝承されているマカトと松金をめぐる伝説を中心に考察してみた。もう一方の伊江島に伝承されているマカトと松金をめぐる伝説に関する考察は、別稿にゆずることとする。

#### 〔注〕

- (1) 原田信之「伊平屋列島における降臨神話」〔奄美沖縄民間文芸学〕第一号、二〇〇一・3。
- (2) 原田信之「屋藏大主と鮫川大主―第一尚氏始祖伝説を中心に―」〔奄美沖縄民間文芸学研究〕第一七号、一九九四・7。『琉球王朝始祖伝説―第二尚氏尚円王を中心に―』〔説話・伝承学〕第八号、二〇〇〇・4。参照。
- (3) 『沖縄民俗辞典』（吉川弘文館・二〇〇八）、「琉歌」の項（波照間永吉氏執筆）。
- (4) 島袋盛敏氏・翁長俊郎氏『標音評釈琉歌全集』（武蔵野書院・一九六八）、五四〜五五頁。歌詞と訳は同書による。なお、本歌の〔語意〕の項に「仲村渠」伊江島の旧家。この家に美しい一人娘がいて、恋人との会う瀬が自由でなかったとの物語がある。「そばいど」側戸または背戸。家の裏側にある戸。「ますだれは下げて」父母が留守で安全という信号。もしすだれが下がっていない場合は父母在宅で危険だという約束。「あにあらはもとまば」そうと思われたら、即ちすだれが下がっていると思ったら」とある。
- (5) 琉球大学附属図書館伊波普猷文庫所蔵『屋嘉比工四』〔琉球大学学術リポジトリ〕写本画像、十二丁裏）によった。
- (6) 琉球大学附属図書館伊波普猷文庫所蔵『琉歌百控』〔上編 琉球百控乾柔節流〕写本（琉球大学学術リポジトリ）写本画像、九丁表）によった。外間守善氏校注『琉歌百控』（岩波新日本古典文学大系『田植草紙 山家鳥虫歌 鄙廻一曲 琉歌百控』岩波書店・一九九七所収）、三八五頁参照。
- (7) 注6の岩波新日本古典文学大系所収『琉歌百控』は「仲柄節」の二字目を木偏の「柄」ではなく手偏とするが（三八五頁）、伊波普猷文庫所蔵『琉歌

- 百控」写本から「柄」が適当と判断した。
- (8) 国頭郡教育部会編（島袋源一郎氏著）『沖縄県国頭郡志』（初版一九一九、沖縄出版会・三版一九六七）、三二一～三三二頁。
- (9) 注8の『沖縄県国頭郡志』、七～一一頁。
- (10) 仲田清英氏『伊平屋列島文化史』（私家版・一九七四）、一四五二頁。『伊江島の民話』（伊江村教育委員会）、五七八～五七九頁。
- (11) 話者は沖縄県島尻郡伊是名村字諸見の男性（M45生）。平成四年（一九九二）八月十八日・原田調査、採集稿。
- (12) 注10の『伊平屋列島文化史』、一四四七頁。
- (13) 話者は沖縄県島尻郡伊是名村字伊是名の女性（S6生）。平成四年（一九九二）八月十五日・原田調査、採集稿。
- (14) 『いぜな島の民話』（伊是名村教育委員会・一九八三）所収「美織所の話」の話者（明治三十一年生の男性）も「尚円王」と「仲村渠マカテ」の話として語っている。伊江島でも「マカト」と「尚円王」の話として語る話者が多数いる（注10の『伊江島の民話』参照）。
- (15) 『琉球史料叢書第五』（井上書房・一九六二）所収『中山世鑑』巻四、五一～五七頁。
- (16) 注14の『いぜな島の民話』所収「尚円の係る琉歌」、二四八頁。歌と訳は「尚円の係る琉歌」によった。
- (17) 注10の『伊平屋列島文化史』、一三三二頁。
- (18) 中本弘芳氏編『伊是名村誌』（伊是名村役所・一九六六）、三九三頁。
- (19) 字伊是名の原名と位置は、『伊是名村史下巻』（伊是名村・一九八九）、二五〇頁の「字伊是名」地図参照。
- (20) 注10の『伊平屋列島文化史』、一四五〇～一四五二頁。
- (21) 注14の『いぜな島の民話』所収「伊平屋の松金と仲村渠マカに係る琉歌」、二四五～二四六頁。歌と訳はすべて「伊平屋の松金と仲村渠マカに係る琉歌」によった（仲村渠「マカ」は「マカテ」の誤記と思われる）。なお、五首目

- の訳に「愛しいマカテの美しい顔がまってる」とあるが、引用に際し「あ」を誤植とみて「愛しいマカテの美しい顔がまってる」と改変した。
- (22) 注3の『沖縄民俗辞典』（吉川弘文館・二〇〇八）、「組踊」の項（波照間永吉氏執筆）。『沖縄大百科事典』（沖縄タイムス社・一九八三）、「組踊」の項（当間一郎氏執筆）。
- (23) 当間一郎氏「史料紹介」組踊「仲村渠真嘉戸」について（沖縄県立図書館「史料編集室紀要」第一六号、一九九一・3）、同氏『組踊写本の研究』（第一書房・一九九九）。
- (24) 注23の当間一郎氏『組踊写本の研究』、九〇～九二頁。
- (25) 『沖縄古語大辞典』（角川書店・一九九五）、「にし【北】」の項に、「北。普通、北をニシという。西はイリ。（略）「補説」西は、方言のニシ（北）を漢字の「西」に誤って宛てたものであるが、どちらとも解釈できる場合も多い」とある。
- (26) 注23の当間一郎氏『組踊写本の研究』、一〇〇頁。
- (27) 注18の『伊是名村誌』（伊是名村役所・一九六六）、三四八頁。
- (28) 『沖縄文化史辞典』（東京堂出版・一九七二）の「モーあそび モー遊び」の項に「農村で、夜になって、若い男女がモー（野原）に出て遊ぶことをいう（略）。月夜の晩など、若い男女が、部落のはずれの適当な芝生の広場を遊び場として落ちあい、夜ふけまで遊びふけた。三味線をひく若者が必ずおり、男女うちまじって円陣をつくってすわり、三味線の音にあわせて、いわゆるモーアシビー歌をうたい、手拍子をうち男女うちまじりの踊があった」とある。
- (29) 注28の『沖縄文化史辞典』の「てさーじ 手巾」の項に「昔、農村では男女が恋をした時、娘が男に、自分の魂のしるしとして手ずから織った手巾を贈るならわしがあったという」とある。

〔付記〕

本稿は、日本学術振興会平成二十三年度～二十六年科学的研究費・基盤研究C・研究課題「南西諸島における事物起源伝説の調査研究」（課題番号23520236）および平成二十六年科学的研究費・基盤研究A・研究課題「琉球言語資料のデジタル化とその活用方法の研究」（課題番号24242036）の成果の一部である。

連絡先・原田信之

新見公立大学看護学部 〒七一八―八五八五 新見市西方二二六三―二

（二〇一四年十一月十九日受理）